

ジェーン・オースティン

恋愛エキスパート作家



『高慢と偏見』や『分別と多感』など、その著作が恋愛バイブルとまで呼ばれることもあるジェーン・オースティン。しかし、これらの作品には実は女性の意識変革への強い思いがこめられていたとも感じられる。女性にとって裕福な男性との結婚が至上命令だった18世紀から19世紀にかけての英国に生きたこの女流作家の素顔に迫りたい。

●Great Britons “英国の偉人たち” ●取材・執筆/山口 由香里・本誌編集部

漱石が絶賛した文才

「ジェーン・オースティンは写真の泰斗^{たもと}なり。平凡にして活躍せる文学を草して技神に入るの点において、優に鬚眉^{すゑびし}の大家を凌ぐ」

(『文学論』夏目漱石) 1※たいと：大家 2※しゅび：髭と眉が揃っているの意で男子のこと

ロンドンで留學生生活を送った明治の文豪、夏目漱石。この漱石に最大級の賛辞を送られたジェーン・オースティン (Jane Austen 一七五〇—一八一七) が活躍したのは、漱石がロンドンを訪れた時期からさかのぼること約百年の十九世紀前半だった。そのまた約百年後の今、本はもちろん、それを原作とした映画やドラマでも、世界中の人に最も親しまれている英作家の一人となっていることは周知のとおりだ。

オースティン原作のドラマや映画をご覧になっていない方でも、メガ・ヒットとなった『ブリジット・ジョーンズの日記』はご存知だろう。米女優のレニー・ゼルウィガーが、それぞれに魅力的な硬派のダーシーと軟派なダニエルの間で揺れる、主人公のブリジットをユーモラスに演じたものだが、この映画のダーシーはその名前の示す通り『高慢と偏見』のダーシーが元になったもの。

この役に扮しているのは、BBCドラマ『高慢と偏見』でもダーシー役を演じ、世の多くの女性たちのハートを射止め話題となった英俳優コリン・ファース(十五頁のDVD欄参照)だ。この『ブリジット』には、他にも『高慢と偏見』の設定や台詞がこちらこちらで使われている。

『高慢と偏見』のパロディのような『ブリジット』は現代のラブコメだが、恋と結婚に悩み、誤解やすれ違いを繰り返しながらも、最後には「ミスター・ライト (Mr. Right)」と結ばれる女性の話と、いうことでは、他の主要作品と同様といえる。

ジェーン・オースティンの作品は今も多くの女性を虜にしてやまず、恋愛小説の大家といつて間違いないだろう。ただ、オースティンを評価しない人々がいるのも確かで、その理由は彼女の作品を恋愛小説としかとらえていないからだろう。しかし、本当に「ただの」恋愛小説なのだろうか。

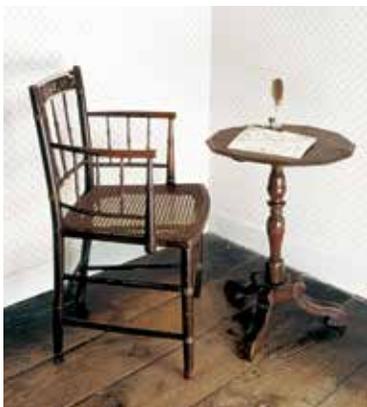
心理描写の走りともされるオースティン作品は、まさに「平凡にして活躍せる文学」。決して品のないものには落とさず、日常生活の中の男女間の微妙かつ複雑、そして時には緊張をともなう関係を描く巧みさはそれまでの作家にはなかったもの。現代的な小説の形を初めて作りあげた作家と言われる所以だ。

また、女性の役割が今とは比べものにならないほど断固として決められていた時代にあつて、オースティン作品のヒロインたちがしばしば見せる強さに、後世の女性運動家たちが試みることになる意識改革の「あけぼの」とも呼べるものを感じるといつてはいい過ぎだろうか。

この点についてさらに述べる前に、日常にドラマを見出す鋭いオースティンの目を培った、その実人生をまずは見てみることにしよう。

結婚は生涯の幸福をかけた一大事

ジェーン・オースティンはハンブシャーのステイヴントンに、牧師の家の娘として一七七五年十二月十六日



ジェーン・オースティンが使ったとされている、小さなライティング・テーブルと木のイス=写真提供：チョートンの Jane Austen's House Museum



に誕生した。アメリカ独立戦争が起こった年で、まもなくフランス革命そして英仏戦争、国内では産業革命が始まるという激動の時代だった。

だが、表立ったことをするのは男性に限られた時代でもあり、海軍でナポレオン軍と戦った兄たちと違い、ジェーン本人は生涯、あまり変わるここのない生活を続けた。

ジェーンは八人きょうだいの七番目、二女だった。仲の良い家族で、八人きょうだいの中にあつて、女の子は二人ということもあり、二つ違いの姉カサンドラとは特に結びつきが強かった。

内気な子供であつたとも伝えられているが、年頃になつたジェーンはダンスの名手として踊りの機会を樂しみにするようになる。当時のダンス会場は娯楽の場であると同時に、若い男女が異性と出会う、お見合い会場のような役割も果たしていた。と言つても、相手の踊る姿にボーっとするようないものではなかつたようだ。

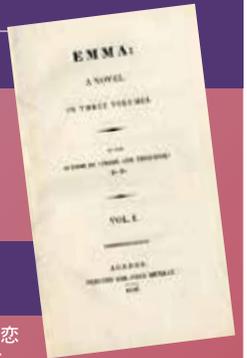
その頃の女性にとって唯一のキャリアとなるのが結婚。文字通り永久就職で、家柄や経済力は結婚相手を探す際に切実な基準となるものだった。

それには、当時の法律や家督相続制度も関わっている。後の産業革命により変わっていくものの、その時代の財産といえは主として土地のことだった。土地を子らに分け与えれば、相続される土地はどんどん小さくなり、その家の力も衰えていくのは目に見えている。そのため採られたのが、長子相

物語はいつもハッピー・エンドで オースティンの主要6小説

※() は出版年、『』は一般的に知られる邦題

『高慢と偏見』を世界の10大小説の1つに挙げた、近代の人気・英作家サマセット・モーム (Somerset Maugham 1874-1965) は、元気な時に最新の注意を払って読まなければ益が得られないような名作とは違って、オースティンの小説はどんなに元気のない時に読んでも必ず魅了されるとして、次のように評している。
「たいしたことが起こるわけでもないのに、ページを繰らすにはいられない」



Sense and Sensibility (1811年) 『分別と多感』『知性と感性』

◆父親が亡くなり、先妻の息子が家を継ぐため、母と娘たちは家を出なくてはならなくなってしまう…。思慮深い姉エリノアと、気持ちのまま行動する次女マリヤンの恋の行方をつづる物語。

◆出版前に大幅に書き直したとも伝えられるが、オースティンがこの作品の元となる『エリノアとマリヤン』を書いたのが弱冠20歳の時！なお、右の写真にあるように、出版時は作者名が「By a lady」としか記されていない。



Emma (1815年) 『エマ』

◆エマは恋のキューピッド役きどり。人の恋心を見抜くのが得意と思っているのだが…。周囲の人々をふりまわすだけでなく、自分の恋には実は不器用というエマを主人公に展開される物語。

◆『高慢と偏見』のエリザベスについて、誰もが好きになるような主人公と述べたオースティンが、このエマについては、「私以外は誰も好きにならないような主人公」と評している。そういう主人公でも読者を引き付けられるようになったという自信の表れか？

Northanger Abbey (1818年) 『ノーサンガー僧院』『ノーサンガー寺院』

◆キャサリンは、当時流行のゴシック小説を読んで空想にふけるような女の子。そのキャサリンが密かに憧れるヘンリーに招待されていった彼の実家は、ゴシック小説そのままのおどろおどろしい雰囲気漂う屋敷だった…。想像力豊かな18歳という設定のキャサリンの魅力があふれる物語。

◆この作品の中で、ジェーンはベースボール（野球）という言葉が登場させている。少なくとも活字としてその言葉を使った初の人物とされている。

Persuasion (1818年) 『説得』『説きふせられて』

◆27歳になるアンの前に、周囲の説得により若き日に1度は別れたウェントワース大佐が再び現れる。経済的にも豊かになり、立派になったウェントワースに、自分はもう盛りを過ぎた年増の女性（27歳は当時もう行き遅れと見られた！）だと思いつつも、アンの心は大きく揺れる…。アンが真の幸せをつかむまでをえがいた物語。

◆晩年近く書かれたこの作品に、通り過ぎた恋を取り戻す主人公が登場させているのが興味深い。この作品も出版後、書き直されている。元のバージョンより、修正バージョンのほうが数段良くなったと評価されている。

Pride and Prejudice (1813年) 『高慢と偏見』『自負と偏見』

◆5人姉妹を抱えるベネット家の近所に、資産家でもハハサムなビングリー、ビングリーよりさらに裕福だという友人ダーシーがやってくる。ベネット家の長女ジェーンとビングリーは惹かれあうが、ダーシーによってそれが引き裂かれたと次女エリザベスは思いこんでしま…。エリザベスとダーシーの恋愛模様を軸にした物語。

◆この作品の元となった『ファースト・インプレッション』も、オースティンがミスター・ダーシーのモデルともされるトム・レフロイと出会った20歳の折に書かれている。早熟の天才かも。

Mansfield Park (1814年) 『マンズフィールド・パーク』

◆貧しい家の娘ファニー・ブライスは、金持ちのもとに嫁いだ叔母に引き取られ、蔑まれながら育つ。内気で臆病なファニーだったが、それでも意思を貫こうと健気に生きる姿をえがく物語。

◆いったん出版された後、新たに書き直しが行われ再出版された作品。

続権と限定相続だ。長子相続権とは一家の土地全部を長男が相続するもの。その長男も土地から上がつてくる収益がもらえただけで、土地そのものを売却したりできないようにしているのが限定相続だ。これにより、先祖代々の土地が受け継がれ、その家も、その土地で働く人々も安泰というわけだ。ただし、浪費癖のある

長男が借金を重ね、土地を含む家ごと手放さねばならなくなつたというようなケースもしばしば見られた。また、例えば『高慢と偏見』で主人公には男兄弟がいなかったため、ゆくゆくはベネット家を甥のコーリンズが相続することになっていたように、娘ばかりという家の場合は、近親の男子が家督を相続した。

さらに資産運用は男性、女性は家を守るものという前提で法も定められており、結婚すると同時に妻の財産は夫のものとなれ、妻が結婚後に働いても、その所得も夫のものとなっていた。それが改正されるのは、一八八二年の既婚女性財産法制定からで、ジェーンの生まれた年から百年余りも後のことだ。

ジェーンの「初恋の人」とする説もある。トム・レフロイこと、トーマス・ラングロウ・レフロイ (Thomas Langois Lefroy 1776~1869)。映画『Becoming Jane』の中では、女性にもてるタイプのチャームな若者として描かれている。アイルランド最高裁判所長官の地位にまで上りつめ、キャリア的には大きな成功を収めたといえる。ジェーンとは違って長寿で、93歳まで生きた。



だが、別の推測をする人もいる。今も残るジェーンか

婚約者のもとを訪れ不在だったカサンドラに宛てた手紙で、ジェーンはトムについて「すごく紳士的、ハ

だが、トムがロンドンに戻る頃には、この手紙を読んだ頃には、もう終わっているでしょう。そんな悲しいことを書いていると涙が流れる」と、お茶目な調子から一転、恋する乙女の心情がこぼれ出ている。

父がステイヴントンの牧師の職を長兄に譲り退職したのを機に、一八〇一年にオースティン家はバースへと移り住む。

耐えがたきは愛のない結婚

結婚相手の家柄や経済力が重要なのは、女性に限ったことではなかった。十二人兄弟の長男で、姉妹や弟たちの面倒を見ることを期待されていたトムは、名の通った家の娘と結婚する必要があったようだ。

二十歳の冬、ジェーンはトム・レフロイとして知られるトーマス・ラングロウ・レフロイに出会う。

二人の仲がどの程度のものであったのか、今となっては定かではないが、後に『高慢と偏見』として出版される『ファースト・インプレッション』をジェーンが書き始めたのが、トムとの一冬を楽しんだ後の一七九六年の秋。主人公エリザベスにはジェーン自身が投影されていると分析されており、そのお相手のダーシーは、トムをモデルにしたのではないかと

実際のトムのほうは、翌九七年の春に学友の妹と婚約。同年にマダム・レフロイを訪ねたものの、ジェーンに会いに来ることもなかった。

二十歳のほろ苦い出会い

どの作品の中でも結婚が大きく取り上げられているのは、その時代に生きた女性たちにとって結婚は避けては通れぬ、まさに死活問題だったからに他ならない。ヒロインたちが最終的に到達する「幸せな結婚」を、誰よりも望んでいたのはジェーン本人だったかもしれない。



小説『高慢と偏見』の中の挿絵。ベネット家の居間の様子。娘5人と、ベネット夫人(右端)の姿が見える。=イラスト: Hugh Thomson

その年の夏、ロンドンのコーク・ストリートからは、ロンドンで勉学中のトムが身を寄せていた彼の叔父の家があった通り。当時、その通りに宿屋があったという記録もないことから、トムの所にジェーンが滞在したのではというのが、ジェーンとトムの恋物語をえがいた映画『ピカミング・ジェーン』(下記参照)の作者ジョン・スペンスの説だ。

その主要作品をDVDで楽しみたい!

生涯をたどるなら...

Becoming Jane (2007年/映画)

この映画のようなロマンスが、ジェーンとトム・レフロイの間にあったという『証拠』は残っていない。だが、なかったという証拠もないのがミソ。歴史のあいまいな部分をロマンチックに仕立てた一作。アイドル女優から躍進著しいアン・ハサウェイのジェーン・オースティン、あつという間にアンジェリーナ・ジョリーと共演するまでになったジェームズ・マカヴォイのトム・レフロイと、若手成長株2人の共演も楽しめる。

Miss Austen Regrets (2008年/BBC ドラマ)

脚本を書いたグウィネス・ヒューズが、真の脚本家はジェーン自身と評するほど、ジェーン本人が書いた手紙など史実をふんだんに盛り込んで作られたドラマ。実像に近いジェーンと思ってよさそうだ。正統派美人で地に足の着いた姉カサンドラ役にグレッタ・スカッキ、個性派美人で時に辛らつな意見も言う妹ジェーン役にオリヴィア・ウィリアムズというのはなかなかの配役かも。

主要作品を観るなら...

人気の高い『Pride and Prejudice』など、古くはローレンス・オリビエ出演のものから最近のキーラ・ナイトレイ主演のものまで、数え切れないほどあるが、ここでは、手に入りやすい最近のものから、比較的原作に忠実+楽しめる、お勧め作品をご紹介します。

Sense and Sensibility (1995年/映画)

出演しただけでなく脚本も書いているエマ・トンプソンはこの作品でアカデミー脚本賞を受賞。作品自体もゴールデン・グローブ賞を受賞した秀作。監督は『ブロードバック・マウンテン』のアン・リー、出演もケイト・ウィンスレット、アラン・リックマン、ヒュー・グラントと主役級の英国ビッグ・スターがズラリと揃った豪華競演となっている。

Emma (1996年/映画)

周りの人達の恋の世話焼きに奔走し、肝心の自分の恋は見当違いになってしまうエマを、可愛らしい女性としてグウィネス・パルトロウが演じている。この作品を見て、英国人だと思った人もいたというほど、アクセントごとエマになりきっているグウィネスのほか、アラン・カミング、ユアン・マクレーガ、トニ・コレットもいい味を出している。

Pride and Prejudice (1995年/BBC ドラマ)

原作の起伏を6話連続ドラマにうまくまとめている。エリザベス役のジェニファー・イーリー、ダーシー役のコリン・ファース始め、それぞれの俳優が役柄のイメージを生きて見せており、評価のきわめて高い作品。池に飛び込み、濡れたシャツ姿を見せるコリン・ファースの姿も話題をさらう、高視聴率獲得の一因とも擲擧された。さてはBBC、最初から女性層を狙った?

Mansfield Park / Northanger Abbey / Persuasion (2007年/ITV ドラマ)

ITVのジェーン・オースティン・シーズンとして放映された3作品。『ドクター・フー』でお馴染みのピリー・パイパーがファニー役の『Mansfield Park』、原作同様軽いタッチで仕上がっている『Northanger Abbey』もそれぞれに楽しめるが、出来のいいのは締めを飾った『Persuasion』だろう。コリン・ファースの池シーンが『Pride and Prejudice』のそれはサリー・ホーキンスがバースの街をひたすら走るシーン。『ハッピー・ゴー・ラッキー』でベルリン映画祭女優賞も受賞した演技派のサリー、耐える女という感じでアンを演じているだけに、最後の疾走シーンが爽快。



年が亡くなったという突然の知らせだった。青年は牧師だったとも伝えられるが、名前などは残されていない。その数年前にはカサンドラが婚約者を熱病で亡くしていたことから、姉妹はより一層深く結びついた。

ジェーンがプロポーズを受けることになるのは、その翌年だ。

二十六歳になっていたジェーンにとつて、六歳年下の裕福な家の息子であるハリス・ビッググウィザーは申し分の無い相手だった。当時の二十六歳といえば若さの終わり、中年の始まりと考えられるような年齢だ。ジェーンも、今後、これだけの好条件の相手が現れるとは考えがたいと思つたのか、一度はプロポーズを受諾するところが、その翌日には断つてしまう。

なぜ、ジェーンは心変わりしたのか。

ジェーンの作中、主人公の家庭のおおかた、またジェーン自身も属していたのはジェントリーという新興階級（地主階級）だった。貴族よりは下ながら、支配階級に含まれるジェントリーは土地と使用人を有するものの、年収も千ポンド（現在の三万五万ポンド相当）から一万ポンド（現在の三十万五万ポンド相当）と経済的には幅が広く、生活が苦しいジェントリーも少なくなかった。

オースティン家もそれほど豊かではなかったようだが、ジェーンは経済的な安定のためだけの結婚をよしとしなかったのだろう。

ンが母親から批判されるシーンがあつた。母親は言う。「お金で幸せは買えないかもしれない。でも『safe』（安定した暮らし）を得ることはできる」と。このドラマの中でジェーンは敢えて反論しなかつたが、彼女はあ

る手紙の中で「I would prefer to endure rather than marry without affection」(愛のない結婚に

くれば、どんなことにも耐えられる)。

ジェーンの作中のヒロインたちは、この信条を貫き、苦しみや悲しみに挫けることなく行動し、やがて夢を叶えるというのがお決まりのパターンだ。ジェーンは、恋愛小説という形をとりながら、世の女性たちを励まし、希望を与え続けた思想家と呼んでも良いのではないだろうか。彼女の密やかな闘志が、行間にこめられているように思えてならない。

初めて手にした原稿料

パースに在る間には、さらに不幸な出来事が相次いだ。

ジェーンの友人マダム・レフロイが落馬で亡くなり、一八〇五年に父ジョージまで亡くなってしまふ。一家の主を失ってしまったジェーンは、母、姉とともに、五兄フランクとその若い妻のもとをはじめ、縁者の家を転々とするようになる。不安定な生活が続いた。

しかし、悪いことばかりではなかつた。この間に四兄ヘンリーの助力もあり、ジェーンは初めて出版社と契約を結ぶ。後に『ノーサンガー僧院』として出版される『スーザン』という物語を十ポンド（現在の約三百七十ポンド相当）でロンドンの出版社クロスピーに売つたのだ。当時とし

ても安いその価格はジェーンが新人作家という以外に、女性作家だつたせいもあると見られている。それでも、自分の書いたものが出版社に売れたことは、大いにジェーンを元氣付けた。

とはいえ、数カ月たつても数年たつても本は出版されず、ついにジェーンが、活字になつた『ノーサンガー僧院』を見ることはなかつた。

匿名で出したデビュー作が大ヒット

裕福な家の養子となつていた三兄エドワードが、一八〇九年にチャロンの別宅をジェーンたちに提供。その家がとても気に入つたジェーンは、母、姉とともに、そこでしばらく幸福な日々を送つた。

その頃には結婚していた兄弟たちの子供は総勢二十人を超えるほどになつていたが、その姪や甥にとつて、ジェーンはまたとない良い叔母であつた。幼い子らとは庭で遊び、長じてはロンドン見物に連れて行つた。やがて記念すべき一八一一年を迎える。

ヘンリーが出版業者トーマス・イガートンと交渉し、ジェーン初の本となる『分別と多感』が出版されたのである。ただ、本は良く売れたが、本に作者としてジェーンの名前はなく、「バイ・ア・レディ」として出版された。

牧師の娘であるジェーンは、どんな評価を下されるかもわからない本しかも恋愛ものに実名を出すわけにはいかなかったようだ。初版本だけでジェーンの収益は百四十ポンド（現在の約五千ポンド相当）になつたが、姪や甥でさえ、ジェーンが人気作家となつたことは知らされなかつた。

ある日、ジェーンと姪の一人アナが出かけた移動図書館で、アナが『分別と多感』を手にとつた。当時、まだ高価だつた本は、そういった図書館にお金を払つて、借りて読むこと

も広く行われていた。普段、ジェーンが話す物語を喜んで聞く姪や甥の中の一人であつたにもかかわらず、ジェーンが書いた本とは知らないアナは「こんな題名の本は、しょうもないに決まつてるわ」と、ページを開くこともせずに戻したという逸話も伝えられている。

一八一三年には、イガートンがジェーン二冊目の本となる『高慢と偏見』を出版。その年の内に増刷されるほどの人気で、最もよく読まれた英文学の一つと呼ばれるに至る。

これは、前述のようにもとは『ファースト・インプレッション』という題名で書かれていたものだ。トム・レフロイと出会つてまもなく書かれたというだけでなく、トムがアイランド出身で、ダーシーはアイランドで有名な一族の苗字だつたことなどから、ダーシーのモデルはトムであろうと言われている。

この本はジェーンにとつて思い入れの強いものであつたようだ。本がロンドンから届くのを待ちかねていたジェーンは、手にした本を、まるで自分の子供のようにだと書いている。だが、この時にはもう、ジェーンにはあまりに早い最期が間近に迫つていた。

プリンスのお気に入り作家

翌年にイガートンは『マンスフィールド・パーク』を出版。これは発売六カ



父王が正気を失った後、リージェント（摂政）として長い間、国王の座がまわってくるのを待ったジェーン。派手好みで浪費癖があることも知られ、リージェント・ストリートの建設なども命じた。

ジェーンが息を引き取った、ウィンチェスターのCollege Streetにある個人宅。中は見学できないが、プラーク(標識)=写真右=が掲げられている。



この『エマ』以降、イガートンではなく、ロンドンでよく知られた出版業者ジョン・マレーが、作品の刊行

である。王からの招待を断るわけにはいかない。ジェーンは、プリンス・リージェントのロンドンの邸宅へ出かけていった。実際にプリンス・リージェントに謁見こそしなかったが、王室の図書館員の勧めで、次の作品『エマ』はプリンス・リージェントにささげられることになった。その頃の作家としては、誇るべき栄に浴したの

である。しかし、嫌いだといっても、後の国王からの招待を断るわけにはいかない。ジェーンは、プリンス・リージェントのロンドンの邸宅へ出かけていった。実際にプリンス・リージェントに謁見こそしなかったが、王室の図書館員の勧めで、次の作品『エマ』はプリンス・リージェントにささげられることになった。その頃の作家としては、誇るべき栄に浴したの

月で売り切れ、ジェーンは着実に作家としての地歩を固めていった。そのまた翌年の一八一五年、静かに暮らすジェーンの日常から、かけ離れたことが起こる。ジェーンは匿名で本を出版していたが、彼女の作品のファンで、それぞれの居城に本をセットで用意しているというプリンス・リージェントから、ロンドンの邸宅への招待状が届けられたのだ。放蕩息子として知られ、結婚後も、婚前から困っていた愛人との関係が続け、王妃をないがしろにしていたこのプリンス・リージェント(後のジョージ四世)を、ジェーンは実は嫌っていたという。



最初は痛みをおして、執筆を続けていたジェーンだったが、じきに歩くことも困難になり、最後はヘンリーとカサンドラに連れられてウインチェスターで療養、そこで息を引き取った。最初の本が出版されてからわずか六年後の一八一七年七月十八日のことだった。

破産とさまざまな出来事がめまぐるしく起こる中、ジェーンの体に暗い影が忍び寄っていた。彼女の身体を病が蝕み始めていたのだ。現在でいう副腎不全、またはリンパ系の病気があったのではとも言われるジェーンの病状は、激しい痛みをとまなうものだった。

手掛けるようになる。『エマ』は売れたが、すぐ後にマレーが出した改訂版の『マンスフィールド・パーク』は売れ行きが悪く、『エマ』の収益が相殺されてしまった。さらにこの頃ヘンリーが興した銀行が倒産。負債を抱えたヘンリーはじめ、その銀行に投資、預金などしていた兄弟たちも大金を失い、ジェーンと姉、母を支えることが難しくなってしまったのである。

たった一人で起こした革命

ない。後世に残る大作家であつたにもかかわらず、誰その娘、誰その妻としてしか生きる事が認められない、その時代の大多数の女性たちとさして変わらない生涯を送つたということになるのだらう。アイルランドで要職に就き、

当時の未婚女性の例にならぬ、カサンドラ一人が棺を見送るひっそりとした葬儀が行われた。ヘンリーの手配で、ウインチェスター大聖堂に埋葬されたが、墓碑銘にさえ作家としての功績は記されていない。

激動の時代の中、ジェーンはたった一人女性革命を起こしていたのかも知れない。その思いは今も活字の中に、あるいはドラマや映画といった映像に形を変えて色あせることなく輝きを放っている。

二〇〇四年、英国のラジオ番組「ウーマンズ・アワー」である投票が行われた。「あなたの心に語りかけ、自身に対する認識を変えた、または女性であることを喜ばしく感じさせた小説」を選ぶもので、一万四千人に上る投票が寄せられた中、一番多く票を集めたのは「高慢と偏見」だった。

その中の著者についての説明で、ヘンリーは初めて著者の素性を明かした。死後に、ようやく作家としてジェーン・オースティンの名が認められるようになったのだ。自分の気持ちに正直に生きて、最後にはミスター・ライトとハッピー・エンドを迎える主人公を描き続けたジェーン。結果的に生涯独身を遁すことになったジェーン自身、それがいかに難しいことであるか、身にしみて知っていたはずだ。それでも、真つ直ぐにがんばる女性主人公達を、ハッピー・エンドで祝福したジェーンの声援は現代の女性たちにまで、しっかりと届いているようだ。

幸せな家庭も築いていたトム・レフロイが、ジェーンの死を聞きつけ、ロンドンに駆けつけたことも伝えられている。

十ポンドで売られ出版されないままだった『スーザン』が、ジェーンの存命中にヘンリーによって買い戻されていたが、マレーがそれを『ノーサンガー僧院』として出版したのは、ジェーンの死後となつてしまった。また、最後の完成作となる『説得』も、セットで出版された。

ジェーン・オースティン 緑の地を訪ねて

Jane Austen's House Museum ジェーン・オースティンの家博物館

Chawton, Alton, Hampshire GU34 1SD
Tel: 01420 83262
www.jane-austens-house-museum.org.uk



ジェーンはここで作品のほとんどを書き上げた。遺品などが展示されているほか、ジェーンがここに住み始めてから200年を数える。2009年7月に向け、新しい見どころを追加する計画が進められている。なお、バースの「ジェーン・オースティン・センター」とは、どちらが「ジェーンの家」としてふさわしいか、ちょっとしたライバル関係にあることが報じられている。

【開館時間】 6~8月 10:00-17:00
3~5月、9月~1月1日 10:30-16:30 (12月25、26日を除く)
1~2月 週末のみ 10:30-16:30
【入場料】 大人 6ポンド/シニア・学生 5ポンド

Chawton House Library チョートン・ハウス図書館

Chawton, Alton, Hampshire GU34 1SJ
Tel: 01420 541010 www.chawton.org

ジェーンらにチョートンの別宅を提供した三兄エドワードが住んでいた屋敷。今は図書館となっており、1600年から1830年までの英国の女性作家の資料なども展示。図書館部分以外もガイドツアー(要予約)で見学可能。

【ガイドツアー】 火、木曜の2時半から
大人 £6/小人 (5~15歳) 3ポンド

The Jane Austen Centre ジェーン・オースティン・センター

40 Gay Street, Queen Square, Bath BA1 2NT
Tel: 01225 443000 www.janeausten.co.uk

バースでのジェーンの家や、『Northanger Abbey』『Persuasion』に登場する場所などを巡るツアーも主催。2008年中は英国のアカデミー賞BAFTAやエミー賞などの受賞歴もある衣装デザイナー、アンドレア・ギャラーが担当したBBCドラマ『ミス・オースティン・リグレット』の衣装も展示されている。

【開館時間】 毎日 9:45-17:30 (7~8月の木曜は19:00まで)
* 11月9日~09年3月13日の日-金は11:00-16:30/土 9:45-17:30
* 12月24~26日、1月1日

【入場料】 大人 6.50ポンド/シニア・学生 4.95ポンド



Winchester Cathedral ウィンチェスター大聖堂

1 The Close, Winchester, Hampshire SO23 9LS
Tel: 01962 857200
www.winchester-cathedral.org.uk



北身廊にジェーンが埋葬されている。7世紀からの歴史ある大聖堂にはビクター・センターも併設されており、冬季はアイス・リンクがオープンするほか、11月27日から12月14日までクリスマス・マーケットも開かれる。

【開場時間】 8:30-18:00 (日曜のみ17:30まで)
* ビクターセンター、カフェ、ライブラリーなどの開場時間についてはホームページ参照

【入場料】 大人 5ポンド/学生 3ポンド

St Nicholas Church 聖ニコラス教会

Steventon, Basingstoke Hampshire RG25 3BE

ジェーンが25歳まで暮らした牧師館が(教会に隣接)、当時とほぼ変わらず残っている。父ジョージの後を継いで牧師となった長兄ジェームズと妻の墓もある。ロンドンで興した銀行が倒産後、牧師となっていた四兄ヘンリーも、長兄が亡くなった後を継ぎ、甥のウィリアムにその職を譲るまで、この地にとどまった。

Henry's flats 兄ヘンリーの住まい

23 Hans Place, London SW1X 0JY
10 Henrietta Street, London WC2E 8PS



四兄ヘンリーがロンドンで銀行家となっていたことから、ジェーン、また他の兄弟たちもよくヘンリーのもとを訪れた。ジェーンは主に観光と出版社との打ち合わせに上京していたという。ヘンリーの銀行があったヘンリエッタ・ストリート、病に倒れたヘンリーの看病にジェーンが長期で滞在了したハンズ・ブレースにはジェーンの名前入りのプレートがかかっている=写真。

The British Library 大英図書館

96 Euston Road, London NW1 2DB
Tel: 0870 444 1500 www.bl.uk

大英図書館にはジェーンが使っていた机とカサンドラに宛てた手紙、初期のノートが展示されている。